

新鑄

椿説弓張月

續編
卷六



13
2945
18



門へ13
2945
巻18

吉野

大田屋

鎮西八郎 椿説弓張月續編 卷之六



第四十四回

東都

曲亭主人編次

尚寧王戯言あそび禍を喚ぶ

中婦君の悪報創よせられ

尚寧王の二十八甲申即日本安元二年秋九月七日夜丑二の比及中婦君

俄頃小産の氣つれ多しぬとのありえれて宮内女官奔走

する程小國相利勇いそだありて産室へ冊に入ると女官良醫所

とりいども漫々出居さるるに許さる尚寧王を緯の鏡成やう

天ふびら地ふびら産室へ使をさす。安否を伺ふこと只見

櫛の齒を挽かざり。いづくにもなく。王子誕生すはして母子安

泰らり。とまらひ折くら。曠雲忽然と塔の下母まり當下尚寧王の

春丸長月續編卷之六

昭和九年七月九日 晴末

蒙雲宮室位の海よりに召のがして満面お笑成合と國師の神
 著空一のむびて王子誕生せり。つが見恙なく生育べれや久後の
 吉凶を説きしめと仰されハ蒙雲これをうけたり。殿下は
 安く思召れよ。曩も空山に宣ふせごとく。王子ハ權者の後身ハ
 師ハせハ聰明叡智世ハ傳り。壽命ハ天地ともハ等しき。ハ
 今ハ青宮ハ宮て世子ハ立二歳ハあり。多ハ速ハ位ハ傳
 ぐ。万機ハ政をまじり。多ハ邦家ハも。泰平ハして士民
 徳化ハ浴。道ハ送。れを拾りて夜戸ハ復。竟風舞西五穀
 を播。て終。賊民ハ。是併。殿下有道の餘慶ハ。ハ
 とす。世ハ。王限。て産。育。等。閑。慈。愛。ハ
 小利勇ハ腹心の家隸。何。が。妻。を。の。姪。あり。さ。ひ。く。ハ。

乳母ハ進。し。ま。て。方。人。の。に。薬。餌。を。主。せ。ハ。衆。官。足
 次。疑。ハ。中。婦。君。年。の。齡。五。十。ハ。月。来。氣。子。孕。ハ。ハ。ハ
 して。猛。ハ。王子ハ産。ハ。と。怪。して。竊。ハ。議。り。の。ハ。ハ
 蒙雲利勇ハ。威。ハ。怕。と。明。白。ハ。ハ。ハ。忠。ハ。ハ。ハ
 これを。歎。れ。侍。人。ハ。これ。を。祝。し。て。媚。ハ。その。寵。ハ。求。る。も。多。う。り。さ。か。ハ
 する。ハ。四。五。十。日。ハ。産。室。こ。り。の。日。子。果。母。子。既。ハ。肥。ま。ハ。ハ
 小。ハ。尚。寧。王。ハ。ハ。蒙。雲。ハ。吉。日。良。辰。を。卜。は。ハ。國。中。に。大。赦
 あり。北。谷。の。阿。公。ハ。と。て。罪。ハ。ハ。ハ。免。ハ。ハ。本。日。三。司。百。官。ハ。龍
 宮。城。ハ。召。集。合。て。王。子。降。誕。の。系。賀。を。受。海。鮮。野。味。烹。調。蒸。炙
 の。珍。膳。を。け。ね。て。酒。食。を。賜。ハ。樂。正。塔。下。に。候。と。て。天。孫。歌。太
 平。調。ハ。の。弄。樂。ハ。奏。と。この。日。東。風。平。の。按。司。陶。松。壽。の。と。ら。

煩しとてふくび宝位の右辺の中婦君鳳冠を戴り霞帷を被りて王子次姉母を抱し水晶簾の裏あめり左のうごめり朦朧雲國師黄冠を戴り荷衣蕙帯して侍立せり。その餘國相利勇と首として法司紫中官按司黄帽官親雲上里之子お至るまで官帽を正し袖をつらね斑行くと跪九叩の礼を行ひ。さう万歳とて祝しまうしられかて糸樂も果しる尚寧王と利勇を近くは御ホまぶくつる兒の震器を稱讃せよ。今より東儲よとんととせども。彼生きていまだ百日を過さ才器に稱せられも。よしかたお似たり。まう百官その幼れを悔りてあて従ざるものあふん歎このゆいなるべし。同利勇答まうしや。王子襪縹の中に在せども。原是控者の後身なり。且殿下の聖算既お

六十おめりりもへの世子次をくれんゆ虫とせき。しるし聞るはや。近属富前河の上お振子集合く民謡と。その謡ふ
神人來兮 富藏水清 神人來兮 白沙化牙
といへ。これ則王子降誕の前象なり。躊躇あふまやうのと噂る意まごうくまうせしるが王か。曩あられ舊山の虬塚を突起さんとせしと。都下の童子小童謡して。
惡神來兮 海潮不清 惡神來兮 白砂化蟹
と。こへり。あけて國師忽然と出現と。これ何のこらや。風も利勇答るこく。朦朧雲その氣色をえん。うら微笑斑とてめてまうしや。殿下とて曉まのる。曩も惡神來兮と。這ハ王の世子あはる。寧王女をりて東儲としまめを消れり。か

王女が廢しあふ因り王子降誕あまひね。されば神人來りて
稱嘖と惡神と殿下の御流るる。王女がしひ神人の權者
の後方お在と王子とやうひる。天おはし人をりていしおれ乃
常言空一かぶるおのりごや。とちもくじく回答く。利勇ありて
あつたりの嘆賞と中婦君へのはびび笑て斜るふに飲と殿下さ
て狐疑しあめかれ祥瑞あるのを誰か否し侍るべし。や。立世子
のふを議定めはしあへしとさるる。嗚乎これ何等の妖言とや。
往時尚寧王忠臣の諫を聴と虬塚を發て不覺お惡魔を走せ
矇雲遂お國中は横行するやりて惡神未だ白砂化蟹とら童
淫せり。今亦神人來り富藏水清と童謡するの源為朝王女
を扶掖て小琉球より國改の浦お著紀し久志金武の同切を尋て

富藏河をうらり涉て。遂お南風原お到る。祥なれを尚寧王慮
足らばとく。兩ながら曉はと矇雲は説或心されて。まことと説ひ内宮
お仰と。珠の箱をとるまじ。さうらこれを捧りて利勇お對ひ
今日より王子がまき東儲と相國及び傳と傳國の神宝琉球
二顆の珠の裏お寧王女がその一顆を失ひて。今も不完くはと
之ども先規おまじしてこれを王子お附属せん彼りの善惡はあ
遠も後宮お親育し。あして後お中城の世子殿お移し居とこれ
ハ相國且この珠を守て等困あるせと説あはし件の珠を遠は
あへ利勇の恭しく受おさるて。三司百官お立世子のふが令あ
それば。さるる歳と祝しまじし。且して尚寧王ハ又矇雲お對ひ
國師年々國のふお綱福吉凶を説示と。一は違ふことと。し。これ



櫻雲が
 幻術
 梅敷
 致三



おりの名あれハ必形あり。夫名ありて形なれば禍と福との。困師
 の神術ハ因テ。その形ハ入ることを以て。彼はつべれ。彼と微笑と同一ハ
 蒙雲回答。殿下禍福ハ形なしと宣へども。名ありのハ形あり。
 取あれりのハか。その名あり。彼ハ月日の悠遠にして。その小大を
 量がらば。名字あり。日本ハ日ハ大日靈尊とし。月ハ月讀
 命と稱。又さらえ男と異名と僧家ハ日と名。て阿弥陀如來
 と号。さらば。そのころ。その名あり。亦日の姓と張名ハ表字ハ長吏
 月の姓ハ文名ハ申。字ハ子光と老子歷藏中經。潜確類。みんえ
 して。況禍福の形を。夫福と。その形牛の如く。身ハ肉申ありて五
 色鮮明あり。名づけて天鹿といふ。御天。王者の道徳と。これハ物々天
 下ハ福をいふことなり。沈約。又孟康。曰。角一。あを天鹿と。と

天鹿のさし
 年のてくち
 ら全
 大なる鮮
 あり其狀
 のて流類
 卷之六十
 身十九張
 おつは
 んの長
 ハ思
 宋の哲宗
 元祐元年
 ハ日本堀
 河院實治
 二年ハ當
 百安元二
 八十九年以
 ありは
 ありは近
 ありは

両角ハ辟邪と。蓋天鹿辟邪ハ獅子の属。揚用修あり。と
 く。天鹿と蝦蟇の大なるの。と。その謬こと甚。潜確。近ごろ
 宋の哲宗の元祐年間。化して道士となりて。市お並び。る。益壽
 聖人と稱。風俗。或ハ宋の仁宗の時。古今。纂要。一名ハ福祿壽。又南
 極老人と号し。泰山老師と稱。五雜。天竺。西てハ吉祥天女と号く。
 一名ハ功德女人の。乃ハ猛利福德の。應報ありといふ。その形。馬幅
 頭ハ虎のごとし。これを鬼門と号く。往古。黃帝神荼鬱壘。成りて。
 これを捕て虎ハ餌。といふ。風俗。唐の玄宗帝の。開元。年。開窮鬼
 さかりて。帝の夢。入りて。ぶ。ら。虚耗と名。生けり。揚貴妃ハ。續香

囊と上の玉笛を盗去らんとして鐘馗の神其小駝らる事文類引
 逸志曰云云
 天空少てハ黑暗天女又黒耳女と稱人間小禍とるこ成主といふ
 相貌究く醜惡し俱舎論又祖庭日本ハ亦形をいりて只その
 名を麻我通未の神と稱ふ麻我通未といふ禍神といふまおほじ
 東方の古言中禍を未我といひり日本又悪吉又を麻我許登と
 訓たり万これ則曲アて直くふぬをあらいふとそその名を送ま
 異なれどもその物へさる禍をいふる抑福ハ来しかして禍ハ招
 け易し殿下まづいづれの形を離され仰の隨小これを致さし
 と緯精細小意ちうせし尚寧王これをせよ。賑然と打笑ひ
 國師かくのこく博撒微妙の神術あり。それその難れを後して易
 けを先おせん速小禍の形狀を見せめと宣へハ蒙雲いと易れりし

一と獲つ。口小咒文を唱へ印相して眼ハ因志じありて外面をじ
 招く小忽地筑登之ホ五七人怪れ獸を鐵の鏢りて執る。牽て
 庭上よこあはり。さてすうは中。臣ホ目今御苑の中小于てかハ
 獸を獲り。そのまよひまごんもなれと名をぶらふるりのちよ
 一が直まその覽小伎なることとせえおられハ利勇仰を直して獸ハ
 地下小牽居じ君臣奇しくこれをみるは形ハ牛に似る頭ハ虎
 小類せり。當下尚寧王ハ蒙雲をえりて。國師の獸ハ小類
 小未曾有のりのち。その名をまじゆへと仰且ハ蒙雲らけあり。これ
 則同一多る禍あり。とまうは。之司百官これをみて駭然と驚き
 怪こころ小忌嫌がりのほ。王又蒙雲子對ひ國師の神術小依
 ぐ。それ目前小禍の形狀をみるを恐るるを恐る。そもこの獸ハ何の能

あり。と。同。多。人。ハ。嘯。雲。然。然。と。して。殿。下。彼。常。中。言。を。受。め。り。と。し。や。福。
 福。小。門。は。口。人。の。招。く。処。に。あ。る。と。し。り。國。君。を。道。う。れ。ば。その。國。を。福。
 さい。按。司。を。道。な。れ。ば。その。城。を。喪。じ。士。庶。人。を。道。う。れ。ば。その。身。を。保。
 づ。じ。む。此。獸。の。能。う。の。と。し。う。け。を。尚。寧。王。に。受。め。り。と。し。ん。彈。一。を。
 して。六。畜。押。う。り。の。お。あ。ら。び。さ。り。牽。退。よ。と。仰。じ。ハ。嘯。雲。と。し。牙。
 派。起。し。て。冷。笑。ひ。暗。君。を。招。く。こ。と。久。し。彼。い。う。そ。の。退。く。べ。た。
 中。婦。君。荒。淫。は。して。後。宮。を。濫。り。國。相。利。勇。權。を。弄。び。て。寧。王。を。
 を。追。討。民。間。に。赤。子。を。棄。ひ。し。り。して。中。婦。君。の。産。り。と。欺。く。こ。う。派。
 の。七。國。民。齒。を。切。り。按。司。黃。帽。恨。を。含。り。の。多。し。既。お。その。禍。を。承。
 じて。これ。を。退。る。こ。と。あり。ある。と。い。ふ。その。言。語。い。ま。ご。訖。ら。ご。し。と。
 軟。弱。と。い。え。る。怪。獸。奮。然。と。して。怒。れる。形。勢。眼。ハ。百。煉。の。鏡。お。

紅酒 球の鳥鳴 太平山 酒の醸 酒の醸

朱。を。洗。れ。こ。う。牙。ハ。千。口。の。劍。を。逆。に。裁。る。ご。く。一。声。啼。り。と。忽。地。
 濼。を。引。断。離。玉。を。閃。り。と。跳。あ。り。て。尚。寧。王。お。花。か。れ。ハ。王。ハ。愕。
 然。と。駭。れ。怕。と。撲。地。と。仆。し。と。律。切。多。ひ。ぬ。中。婦。君。ハ。この。形。勢。お。
 且。驚。き。且。怕。れ。身。が。踏。し。て。逃。人。と。す。れ。を。禍。獸。ハ。脱。し。も。や。り。と。直。
 小。向。勝。次。折。り。仰。き。ま。に。踏。お。し。と。い。と。あ。り。や。り。なる。右。の。足。を。お。の。
 前。足。で。楚。と。踏。を。え。左。の。足。首。に。牙。を。立。と。や。り。く。と。引。裂。や。と。
 小。中。婦。君。ハ。叫。苦。と。叫。び。も。果。を。皮。破。は。肉。開。け。て。二。足。の。紅。絹。を。引。
 に。似。し。り。傍。お。あり。と。乳。母。姉。母。お。の。魂。更。お。身。に。そ。り。て。王。子。が。撲。
 ころ。お。か。れ。抱。き。り。走。り。避。ん。と。す。れ。お。足。は。震。る。や。り。あ。て。は。も。あ。
 是。は。彼。賢。の。肉。を。啖。さ。れ。て。鮮。血。と。と。流。し。出。平。山。ハ。紅。酒。を。醸。し。
 亦。是。後。宮。ハ。細。腰。派。呈。次。ハ。蜘蛛。飢。て。螺。螺。お。似。し。り。利。勇。ハ。これ。を。



本言百鬼夜行集卷之六



禍獸一
怒て悉
映せり

本言百鬼夜行集卷之六

えて吐嗟とむぐ忙しく王子がうらう。波殿を跳こえ。幸しく逃ん
どころふ禍獸のまましく狂ひく欄干と突毀る。飛鳥のこく追ひ逼
る。裳衣丁と嚙咄と。利勇の髪らうつ。の境ともつれまへもええ
しまがら禍獸の額をのぞきて手お持たれ珠を撲地と投げくどむ
明珠の徳や怕とらん。さどがれ猛獸軟くして耳伏せ頭を低つ
遠巡そその間。利勇ハ王子を懐よおし入とく。喘く脱と出歡會門
のめろこに繫やれ馬お囚りたら跨南風原に投て逃去りぬ
かこは経ふ之司諸按司親雲上里之子筑登之木面とここ土の如
く形りて。逃んととるふ足癱麻て雷むりも動れ好を戦慄く
せんまへも。國師願くハ救ひ多く救ひ多くと叫びく。曠雲ハ裳を
結りて宝位小を素と推めり長く黄く髪を握拍て高かりふ

うら笑ひ時するま。尚寧王暗思ゆして政事道お稱して天
孫氏二十五代一万七千八百二年の正統。こふ断殺を衆人など
て曉らる。淫婦中婦君齡半百して子を産んや利勇ハ懐お
まへ脱去とれ嬰児ハ彼亦密ハ民間ハ募めその母を殺して其
子ハ棄ひ王子散々。王子と稱するものなり。唐山の往古ハ徳
ある人お讓て天が下治しむが徳よあしく天孫子お代るべし母
ホマれお後り生れ叛りば地お死んかくてもなほ惑ひく。禍災
怕とこや。お暗れを生く明れお後ひともハ歡樂して福を子孫
お傳んや。どしく回答せよ。とりの。衆皆これ成せて首を叩れ神仙
道徳高くして天は大業を受まへり。維うその臣らるるみ成顔ハ
ざらん。臣ホ柱石の才と。とくも。犬馬の勞を竭しゆひる人速

お位は即多入しと所渡ひ一人おそく刃起して利勇が投捨る。借國の明珠を取進みされば、矇雲大に飲びて件の悪獸をさし招く禍獸の尾を掉す。押さるごとく、矇雲がはより近く、疑て忽地一顆の珠を吐つ矇雲足をこんく驚れらるおりし。この疑ふべうもあぬ、曩ふ寧王女の失ひらる珠を、今位お即お及びて、琬と球と二顆の珠陰陽全く聚ること天の祥瑞を降さお似たり。卿亦今より推さひて、それを矇雲法君とせよとほこりかお告あし、二顆の珠を玻璃の皿に盛らべて、衆人お指示せし。この万歳とぞ唱る。この條のゆりごとく、矇雲が幻術めて、當初一顆の珠を盗とり、今この獸を吐して、衆人お惑さるり。かく矇雲の群臣の慶賀を受て、王と中婦君の亡骸を薄く葬らし。

さていふやう。利勇今偽王子の輔佐して、南風原の城お籠るとも、怖ろし足らんと、只悔がされ、東風平の按司陶松壽の、件の松壽の原素も、國典が腹心のゆり、密に廉夫人の妹ある。余婦真と夫婦の契約をいし、偽りて利勇お佞媚び、戴かれゆり。中城の討ちをうけ、あつて、查國吉と、謀りあし、王女と夫人を救んとする。事急し、て廉夫人遂お自殺せらる。その首をりて、利勇が、斬り一方の困と、りして、後中王女を落さんと計校が。利勇は、兵を退け、さるか、真鶴が死首、刎て、王女の、名か、つと、実な、功は、因り、按司は、拜任せられ、ゆり。これ千里眼をりて、よくそのゆり、を、あつと、いふも、さあ、昔、あれ、が、これを、答、え、ま、ら、び、白、つ、めて、あり、ま、ら、む、それ、が、利、勇、へ、ま、ら、び、位、お、即、さ、る、は、し、を、せ、え、ら、む。

松壽をりて軍師とし。幼主を挾く。軍兵を要め。日うつらば首里を
 攻めんと議さす。あられども松壽の真実を利勇が伏せしむるに
 あらねば。彼が心を竭せしむ。到らば事速に成べし。はや
 松壽が此の軍兵を推しよる。何程の事か。その條北谷
 の阿公が徒らなる足火に向ふ。乞巧のむじ。とて心肝の病ひあふ。そ
 り忽ち志ざらば。寧王女のもと。今武勇勝とよる。筑登之。五十人及びて
 討まじ。猛獸及びて翼とせん。この禍獸がゆくか。ふゆと向ふ。王女の
 隠家がある。ぞれぞ。とくく。といふ。しるれ。筑登之。命を重んず。戎
 具。剣を帯。戟を横。禍獸を先よ。して忙しく。走去り。さる。南風原
 相利勇の偽王子をみれば。抱れ。馬ふら。踏て。おの。采地あり。南風原
 の城へ逃る。俄頃。龍城の准佐をる。ちり。この日。東風原の陶

松壽へ。立世子の沙汰。ころを。病は假托。首里へ。ま
 ぞ。あつ。その日。申の比。及。南風原より。利勇が騎馬の使者。ま
 王と中婦君の。なり。ひねる。は。これを招く。好む
 と。遍ふ。及。び。松壽の。大。驚。て。勢。四。五。十。人。を。南風原
 お。赴。け。その。夜。利勇。亦。會。合。し。間。者。を。首。里。へ。遣。て。體。の。為。体
 張。を。お。その。りの。翌。朝。走。り。か。へ。り。て。曠。野。に。集。て。中山。法。君
 と。稱。る。と。い。く。も。幻。術。お。怖。と。惑。ひ。く。三。司。諸。按。司。彼。を。討。ん。と。せ
 ぞ。と。や。悉。属。後。ひ。て。と。告。し。く。利。勇。は。只。呆。れ。果。て。せん。と。人。知
 ら。と。その。と。も。と。あ。い。く。て。中山。山。南。山。北。の。諸。按。司。へ。雞。毛。の。檄。文
 を。走。て。速。に。我。兵。が。起。し。逆。賊。曠。野。を。討。滅。し。王。子。が。首。里。へ。は
 入。と。位。母。即。進。く。せん。は。し。謀。と。る。ふ。或。は。利。勇。が。累。年。の。好。悪。を



幼主在
 扶之
 利勇
 南風原
 乾
 戦
 王

憎む或ハ禍獣の爲メ族滅せしむるに防めて。さうじくその募
 不慮なるの如く。大里真和志。佐敷玉城。知念具志。改麻支仁
 喜屋武。真壁豊城。小禄とて。十一箇回切の軍兵の。さうじく
 催促し。隨ひて出まわり。よりて利勇ハ松壽及びて軍師に阿公
 を偽王子の傳とし。溝沢流くし。堀沢固くし。只かの禍獣を防ぐの
 外を。あつじくし。なすもあつじく。松壽も又おの所めれば。志とて。ふ
 致さ。只いさづ。ふ日と過さ。とに利勇ハ頻々焦燥て。回切毎
 丹牌及びし。つ。矇雲滅とて。へた勇士も欲得とて。募たり。

茅四十五回

偽王子を挟く。利勇軍兵を聚む
 赤瀬碑。お苦く。王女爲朝。よ達か

寧王女のいぬる。九月二日の。曠昏。不越。来なる。石橋の。は。り。あ。く。

悪少年が。ふ。既。小。勢。も。と。多。ひ。ぬ。と。こ。ん。え。さ。る。お。さ。う。じ。く。白。蓮。姫。の
 灵魂。お。助。ら。れ。必。死。と。脱。と。く。恩。納。嶽。お。け。入。り。その。曉。か。と。お。い。く
 了。う。提。牌。金。查。國。吉。が。中。城。あ。く。利。勇。が。夥。兵。火。破。ら。じ。辛
 ぶ。く。この。山。中。へ。走。り。躲。ん。と。す。う。小。環。會。め。ひ。お。た。れ。ハ。主。従。送
 小。笠。か。る。り。限。り。あ。く。王。女。の。廉。夫。人。の。安。否。真。落。が。忠。死。の。み。と
 い。ひ。お。く。う。ら。ち。泣。か。へ。ハ。查。國。吉。ハ。又。落。龜。母。子。が。り。告。す。か。く
 せ。又。さ。う。い。や。う。某。こ。ん。え。さ。る。途。中。で。路。人。の。う。ち。清。め。を。せ。く。お
 廉。夫。人。ハ。この。お。お。れ。あ。り。と。う。ん。その。み。實。言。さ。り。せ。ハ。いと。痛
 ぶ。く。こ。そ。と。ま。う。い。を。王。女。の。夢。も。あ。く。と。涙。ハ。只。驟。雨。の。降。々。と。く
 め。轉。輾。て。そ。泣。め。あ。この。と。れ。白。蓮。の。灵魂。ハ。王。女。の。身。お。さ。ら。せ
 め。り。け。ん。声。さ。ま。な。ども。日。暮。ふ。か。つ。り。あ。り。ぬ。查。國。吉。と。さ。ま。づ。け。

いひ慰めはかたすれふ。捺者りれくる。夫婦のりのおぼしれが忽然
 と出来りて。王女のほろりゆ。踏踏。この山ハ琉球第一の高峯ふ
 て人もかよつど。世次潜びあふふよつれど。蛇毒猛獸の患ひま
 母しものふは。おのれも夫婦ハ。読谷山のはろりに住居する。山幸
 祈り。おまじくつが家おつらつせ。多入公の及ん。殺ハ。舍荒ち
 ぞじ。といふ。かくまで。つがうん。あつて。忠公りく。誘引する。ふ。隠こ
 り。く。に。あ。り。おん。とおほせ。く。バ。王女ハ。そ。と。查國吉ハ。注目し。あ
 査國吉。そのころを。注。件。の。夫婦。お。對。ひ。汝。亦。が。推。量。の。こ。ろ。
 ころ。お。ゆ。き。と。こ。と。寧。王。女。あ。お。つ。と。る。な。れ。迷。母。中。婦。君。嬖。臣。利。勇
 矇。雲。ホ。が。る。お。ん。身。の。お。れ。処。ろ。く。な。じ。多。入。公。一。且。雲。用。け。て。天
 日。を。つ。ま。あ。時。し。な。か。ん。や。ご。も。つ。く。ゆ。て。舍。藏。進。く。せ。よ。世。お。

あつて。恩賞ハ。乞ふよれ。し。と。説。示。を。い。夫。婦。お。ひ。て。お。の。が。衰。老
 脱。主。従。ハ。被。せ。進。く。せ。御。導。して。讀。谷。山。の。白。屋。み。ま。か。り。
 いと貧しく。の。世。を。怪。營。め。ど。公。と。り。の。信。く。く。飯。を。と。炊。く。款。待
 たり。あ。り。れ。よ。その。夜。より。查。國。吉。が。子。癩。い。と。出。く。遂。ハ。破。傷。風
 ふ。あ。り。た。れ。が。十。月。の。中。旬。に。到。り。て。中。癩。ハ。半。愈。く。る。さて。捺。者。夫。婦
 ハ。毎。日。お。山。に。入。り。て。夫。の。獸。を。獵。く。し。妻。を。薪。を。推。り。或。ハ。磯。に。お。り
 くら。て。海。蘆。を。拾。ひ。て。活。業。と。し。つ。有。一。日。件。の。夫。婦。い。そ。が。い。く。走
 り。入。り。し。寧。王。女。主。後。よ。り。う。ひ。中。う。い。ま。ご。首。里。の。形。勢。ハ。以。て。居
 目。ご。ご。や。あ。り。と。れ。此。度。中。婦。君。の。お。ん。腹。よ。出。ま。す。せ。多。入。公。王。子。次
 世子。お。ま。ん。と。て。この。龍。宮。城。ハ。三。司。官。諸。按。司。と。召。集。合。ま。り。折
 か。矇。雲。剛。の。幻。術。り。て。禍。獸。と。ま。ひ。な。と。怪。獸。して。王。と。中。婦。君。を。次

嗟ひ殺はしおのれ宝位おあし登りて。さうらう法君と稱し忽地三省の
 地を并吞せ。國相利勇の卒じと王子をけ抱え。南風原に逃之
 了く。松壽阿公亦とくもに事次議し。彼是も属託して軍兵を招れ
 せし。矇雲がら滅して。王子を位に即ちととんと謀じとも賢なるも
 愚なるも。さう彼禍獸を怕害て。その募り惑せとも利勇のいよ
 ころさふ。間切毎に牌をうじて。さう勇士を募ると。信國の
 宝珠も失くると一顆も入。矇雲がうこたふ。涙を靡れ。後づるの稀さる
 めうつて。矇雲の筑登之五十人分付して。彼禍獸を牽し。王女を
 うしりしひも。いみふ。さや麓よ追ひ到せり。某夫婦力を竭し。さ
 るがしが経の御衆を引へたる。こゝに在るのみ。いとも危し。さうく山
 が西へさうりて。海邊へ走去る。あめづら。虎は尻脱し。さうる。あは。

とさうしもめども亦外面へ走り出づ。王女の父王の夢でる。よは。あ
 めも果を。さうそのも。いづ。とばう。は。声を惜ま。と注悲傷。お胸うら
 寒うりて。胸と叫び。倒れ身へ。查國吉憐忙と扶起し。慰んとさう。さ
 ば。られ。又。遠恨の涙。と。あ。め。の。さ。う。中。に。あ。ひ。て。さ。う。く。よ。ひ。ひ
 勵し。さう。涙。あ。へ。と。勸め。さう。は。ま。王女。の。い。よ。好。し。沈。て。ま。あ。が
 て。さ。う。さ。う。さ。う。さ。う。王女。と。さ。う。な。が。う。不。幸。は。て。艱。苦。不。堪。さ。う。い。ひ。さ
 殺し。と。敢。な。れ。世。よ。存。命。う。ら。何。の。為。も。罪。な。れ。は。し。や。い。ひ。て。て。
 御免。う。ら。が。り。て。ん。と。さ。う。さ。う。さ。う。さ。う。あ。う。ら。お。母。の。枉。冤。お。あ。な。れ。父。王。の。人。禍。獸
 不。お。ん。身。を。あ。う。さ。れ。め。め。と。さ。う。て。い。う。て。命。を。惜。む。へ。た。勅。心。お。頭。の。息
 われ。バ。こ。そ。抱。を。も。お。り。人。矇。雲。が。賊。兵。お。ら。こ。に。ま。ら。さ。う。さ。う。さ。う。し。も。あ。ひ。ひ。

ころのひびくはるね形勢うね。逆賊蒙雲を討亡。國中又掃清なり。
 ところも孝もすうさめ。日本のいふへはやくの仲哀天皇の后氣長
 足姫尊神后の軍兵をおて。三韓又人討後へさる。
 男児あふへ冠を討討ぬりの軟しと朽と。と練励し。遂に王女又扶
 掖と。撩者の家を走り出さるあても。あはし夫婦のいつるるの世を避
 けあて。かくまて志の信あるり。今の時ふ當ては大臣按司も阿答
 阿答と。蒙雲も属従つと。笑くりの又それへかすらまよるる心操
 こそ有難れと。頻に賞嘆あふりし。王女もうち息改めひて。これち
 ちあふる。彼も冠を御ぐさく。走り去るる。怒れやあつると。主従
 存一く。土舟かたかええこれ。今もあつる撩者が。津屋へうた消せ
 かりにええさるりて。ぬりこれ一本の松のこまて。主従のこの形勢も。

の中へる限りも。原来件のりのどもへ山裾にどよめあんとさる。
 日暮。それが住みかして起す。彼処る。壽松の樹蔭あてありり
 と。じやて曉はてりとも。あはしそつて伏拜し。又山路を西へ下り
 て。浦曲へ走り走り。結処へ喇叭噴鳴。銅鑼鼓の音。海山に響
 ころりて。器よく。寧王女又脱る。せそと馬りつ。蒙雲が賊兵四五十
 人あふく。器械を引捉て。追蒐する。怪れ獸と。真先へ駈立て。既ふ
 事急るり。しる。査國吉信と見えりて。某ころに命を捨てる。王女へ立
 地。悪獸の牙あかけられ。あへうん。とく走り入る。とまじりも果
 ぞ。劔を抜。鬚し。七件の獸へ立逆へ。禍獸へ大に哮り。衝と走り。返りて
 矢庭あうけ倒さんと。跳かれを。査國ま。そ中身又反りて。これ避
 二。三遍。その後方へ立待りて。劔を閃く。刺んとする。怪れ哉。



春説号長月讀新卷之六



吉國吉
身を禍獣
死
寧王女
舟次
鶴亀
借

本言巨別月細卷之六

十七

查國吉が劍ハ三段四段ハ折れて半愈する金瘡口ハ一度ハ裂れて
 鮮血流し眩暈て跌く処ハ禍獸ハ牙ハ張り查國吉ハ膝口ハ太股
 につけて啖ひ一揮ふるて振ふるんとするに查國吉ハなほとあれを
 惡獸の頭と抱れとめて捻挫んと互ハ嘯く声五臟ハ絞るがに一當
 下賊兵ホ走り去る。戟ハとり之ハ查國吉ハ膝ハ左右より刺や
 憐れ。南家曰傾れ。紅粒をらじ遂ハ魂散魄去りて黄泉
 泉ハ流しゆく。勇士の最期ぞめさばしれた。その間ハ寧王女ハ惜くね
 身も查國吉ガ忠死ハ化せじととひ入。道五七町ヲ流延く。中ハ海邊
 小到了らふ。お。そうらびも。胞兄弟とわば。死少年忙しく独木船に
 せ。王女ハ扶乗し進。せ。櫓ハ推搦ハ操り。櫓ハ出とせ。船ハ
 快こと天飛ぶもの。瞬間ハ洋中。い。遙かぞりのに。さ。る。や。ど。お

驟雲ガ賊兵ホ喘く追ひまらうて。い。づ。ら。の。卷。波。捲。り。その。船。久。せ。は。ひ
 か。れ。ど。浪。の。音。の。こ。回。答。して。船。ハ。漸。く。に。迹。を。な。り。つ。禍。獸。も。の。遙
 らる。次。え。く。浪。踏。を。涉。して。追。ん。も。せ。ざ。り。し。く。ハ。王。女。ハ。不。思。議。ハ。虎。口
 を。脱。し。て。少。年。ホ。對。ひ。そ。も。汝。ら。ハ。何。人。の。兒。や。と。か。危。と。云
 救。ひ。し。る。名。告。ま。じ。い。へ。と。眞。ハ。二人。の。少。年。ハ。櫓。械。を。さ。り。あ。ぐ。る。荒
 ら。く。ま。ら。う。に。舟。ハ。某。ホ。兄。弟。ハ。中。城。の。共。司。毛。國。特。ガ。子。も。あ。ら。う。兄。ガ
 名。ハ。鶴。才。ハ。龜。と。呼。れ。父。國。典。ガ。討。て。る。日。親。族。查。國。吉。ハ。惜。み。て。
 母。扶。で。辛。く。脱。去。越。来。の。山。中。ハ。あ。く。録。ひ。く。西。日。と。は。に。い。ひ
 ぶ。る。は。其。処。も。田。ア。か。う。産。月。な。れ。ハ。道。を。う。り。ぬ。母。ハ。瀕。不。扶
 乘。同胞。これ。を。昇。つ。大。宜。味。羽。地。の。果。地。で。り。と。落。ゆ。折。る。金。武
 よ。り。ハ。西。な。り。る。曠。野。を。過。ると。見。母。新。垣。ハ。俄。頃。母。産。の。氣。は。と。て

いづれもよぶる。橋をかたかたて見の茶を買ひて、富貴
 川の上五赴た、兄次追ひ、同船とて同胞とて。母の傷を離し、同
 いと怪しむ。老女が、母を殺され、胎内の見え、彼老婆を奪ひ去
 り。とおぼしむ。哀傷のやうなかな。いへば、さうして、仇の往かどふ
 けり。迷恨の比ん、やうもめ、かて、結朝母の亡骸を水葬せん
 て、富貴河の上五赴た。父も國丹が亡魂を、誘引とて、海邊に迷ひ
 来り。その夜の夢、父が、汝も且くこゝに、母りて、寧王
 女、救ひ、小松に乗し、進ませ、小琉球へ、槽漕り。島北の赤
 瀬の碑のはより、母潜せ、され、彼赤瀬の碑、國祖天孫氏のまゝつ
 りのなり。それ、曩は王命と奉て、彼処に到りて、幣帛たて、まつりて、その
 験灼然するは、し、の、面り、ふえ、り、王女、辛じて、其、処、に、赴、た、彼、碑、に、縛

あり、遠く福が、かへして、福あひ、ひ、ま、え、し。この浦は、独木、松の、深、ひ
 著、と、あ、ら、い、これ、王女の、来、り、ん、る、遠、く、と、か、り、へ、王女の、お、ん、容、止
 の、此、に、あ、て、固、様、く、なる、衣服を、被、り、と、て、いと、精、細、に、説
 志、せ、し、兄、が、え、る、も、母、が、え、れ、も、その、愛、の、一、身、違、り、ど、か、て、そ
 兄、の、この、処、に、あり、て、毎日、海、上、に、眺、ら、し、て、松、の、流、は、よ、う、と、い
 行、よ、今、朝、も、この、松、忽、然、と、して、岸、に、名、を、あ、け、れ、ば、と、い、王女の、来
 り、ん、る、遠、か、ら、と、致、し、む。さ、う、は、密、に、す、ら、し、り、て、い、ひ、果
 志、し、同胞、を、志、す、と、い、て、涙、は、し、ら、し、か、ら、回、答、さ、し、
 せ、ら、王女の、この、物語、を、な、て、頓、に、感、賞、し、忠、う、ら、う、お、毛、按、司、の、名、
 在、寛、に、討、れ、し、その、冥、に、は、主、次、が、お、汝、が、孝、心、を、世、に、傳、へ、り、
 鳴、乎、この、父、は、して、この、子、の、り、亦、憐、し、べ、た、ハ、新、垣、が、横、死、す、り、世、を、

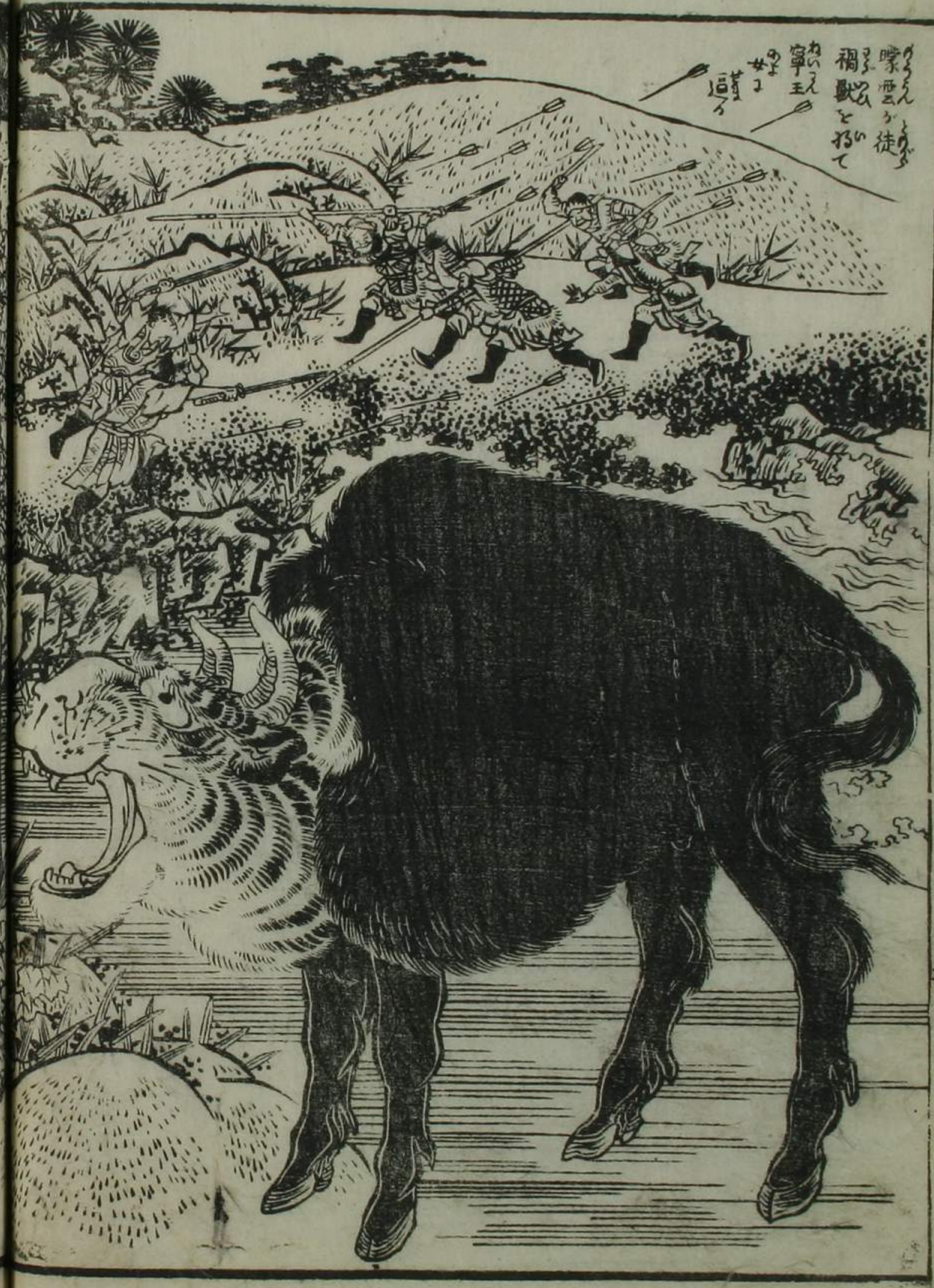
春入長月録卷六

人ふも捨られ。つづらへへ肩うへに富貴三省有る。父王も。禍成晚と有りて。妖賊は位成。墓を獸の牙ふかけられ。墓うへに。多ひぬ。過世の中。命運あり。抑も中城の世子殿。脱法。より。廉夫人。真跡。查國吉。恩も。命を預せ。此に。終ハ箇様。流谷山。獠者夫婦が誠。公す。あらも。鏡を。又宣。流谷山の。獠者夫婦。父母の假。形を。それ。宿。く。や。あ。死。の。後。も。主。救。ひ。子。あ。あ。の。か。ま。て。有。る。の。飲。と。松。答。と。樽。涙。へ。啣。入。の。鰐。龜。の。ほ。ろ。く。悲。しく。小。琉。球。へ。到。つ。た。よ。の。船。の。走。る。こ。と。射。る。矢。よ。り。も。速。れ。ど。水。の上。

穂。中。して。その。曉。が。小。琉。球。の。島。北。よ。る。ぬ。か。て。主。後。と。人。岸。の。あ。り。て。彼。此。を。見。え。う。も。七。ツ。の。間。切。二。百。余。の。村。あ。り。と。び。み。あ。似。そ。嶋。の。中。なる。邊。土。あ。て。里。も。遠。く。人。も。あ。ら。な。く。大。なる。蘆。の。も。生。繁。り。て。浦。風。が。戦。た。左。右。へ。入。江。は。して。路。只。一。條。の。汀。を。そ。ま。り。十。步。可。は。して。赤。瀬。の。碑。あ。り。け。り。高。さ。二。三。丈。も。あ。る。ら。ん。と。い。え。て。その。形。圓。な。柱。の。ごと。く。碑。の。面。も。ま。ま。の。美。人。を。勒。み。し。た。が。その。面。貌。さ。お。び。生。る。が。ど。し。この。國。開。と。た。天。孫。氏。の。建。た。り。と。せ。く。に。ひ。り。て。傳。る。も。ら。る。の。景。迹。実。も。人。作。の。あ。ら。び。碑。の。周。あ。の。藷。と。い。ふ。草。磯。馴。松。の。外。あ。の。塵。も。なく。上。久。の。事。の。ひ。も。竭。が。じ。王。女。の。こ。も。あ。る。その。朝。より。兵。折。と。く。彼。碑。は。禱。の。符。ふ。鰐。龜。の。海。蘆。を。拾。ひ。木。の。子。草。の。実。は。摘。



蒙世を徒
 禍敷とて
 寧王
 女
 居



として王女を勧め進すすむ。同胞もうち食くひと。主後しゆごをやくふ。饑うへ
 凌あげ日暮ひぐりとハ松蔭しょうかげ少すくなり倚より。臥ふしもあつて夜よをあじはす。二日ふたひ
 二日ふたひとさしあふ。第三日みよつひに至いたりて。水鳥みづとり駭おど物ものは駭おどれとれぐあひとく
 こゝろにさしておどる。しうの王女おんむすめはこれらうち騰たりて眉まゆを顰しり。髪かみを
 宣のたまふ。船ふねもかよりの里さとも遠とほれ。かゝれ入江いりえに棲すむるの慌あわしく群ぐん
 づつと。怪あやしく。や蒙もう雲ぐもが賊兵ぞくへいホこに追おひ逼せまりぬ。とおおめ
 ろの宣のたまふ。その言ことひやご統とんらと。四五十よそご人の賊兵ぞくへい嶋首しまのうぶ長ながは御導おんみちすに
 去さる。暮よる直ただちあしよせ。身みつ轉ひくと。とり圍まく。王女おんむすめと生拘いけいんと。聞き
 く。あそ主従しゆじゆハ事急こときうして。舊ふるの船ふねも乗のりもほご。今いまの脱のがれ。と見み
 ゆる。つ。黿かめへうひびしく。そむ敵てきはけ隔へ刀やいばらうらうり。防かれ
 戦いくさふ。後のち少年せうねんと名なひ悔あやり。砍きとる。うらうら。の五六ごろう人びと及およべり。されば

とく。同胞どうぼうが。十五じふごあつても足たり。これ小腕こてあて目めのあつる賊兵ぞくへい防かれ
 留とどべた。やうも形かたちく。終つひふ力衰ちからへ勢いきほひ究まる。兄あやも身み由よし生拘いけいとる。
 賊兵ぞくへいホこ。やんく勇ゆうきて既すでに王女おんむすめと捕とらふ。とすう。王女おんむすめの心こころ地ぢ
 けり。さからりて。近ちかよる敵てきは左右さゆうへ撲う地ぢと投退なげあひ起おこしも。まご。劍けん
 を抜ひく。むらととんと砍きとる。勢いきほひ猛まく。まご。賊兵ぞくへいホこ。これを
 見みく。大おほき驚おどれ。さればこそはし。違ちがひ。王女おんむすめハ神かみの憑より。狂くるとる。と
 ち。禍わざはひ獸けものをりて。嚙かとる。と。異こと口くち同音どうおんに叫こゑぶ。を。と。あつ
 後陣ごじんより。彼惡獸あつあくけものを放はなす。鼓つづみを鳴なじ。鬨こゑの聲こゑを揚あげ。人と獸けものと力を
 裁ありて。又またあつくと競まひ。蒐ある。寧ねい王女おんむすめハ物ものともせ。と。劍けんをとる。座ま
 て。彼禍獸あつわざはひを刺さんとし。あつて刃やいばの鏝あ際さいより。互あつと折をれて。鞘さやのみ主しゆ
 の身みが残のこり。今いまのからと。おせし。後のちも。あつ。閃ひりと。飛とて。赤瀬あかの

碑の脊小鯨と。これ以看として一息吻とけりしもめへぞ禍獸の
 まましく哮狂ひて。矢庭よ追ひ逼りつ。石の面お彫りし美人を
 王女とや見たり。けん突然として響こけけけ。その碑俯しふ倒れ
 かへて天地も崩る。むろりれ音して。さしも猛と怪獸が半身土中
 へ打伏し。されば改を碎し。肩腰を折じ。りうぞもに石は打れ。ひ
 めふなりて。死する賊兵少く。比奇うろろ。赤瀬の碑は天孫氏
 これを建。一万七千八百二年の今。小至るや。て暴風暴雨も
 朽と傾と揺ね石もおのづから倒りて。禍獸を壓。然れこそ
 不可思議なれ。とと世の澆季お及ぶ。とくとも。祖神の威徳る。此
 石もやぞ。まうらん。禍獸へ反起んとて。蠢れ。が。あじ。と。あま
 けれ。けり。泡を吐こと。千尋の練成。練成とがごとく。泡の消れお

随ひて。獸の形土中に滅。蟄やぐて。とんえ。の。う。り。先陣夥
 石を打。遂に禍獸人失。されば。後陣も共。辟易して。左右
 ろう。の。勢も。から。と。は。れ。ば。と。て。王女を。勢。り。さ。後難脱と。ご
 志とや。あひ。らん。め。れ。生。拘。れ。と。罵。り。あ。ひ。て。二十餘人。鋒。以。持。へ。嘯
 れ。叫。び。撃。て。か。れ。お。王女。の。石。の。倒。る。と。れ。土。つ。れ。め。か。ら。お。袂。を
 布。して。進。退。自。在。る。ら。に。劍。を。折。じ。と。れ。ば。天。を。仰。ぎ。嘆。息。し。て
 次。東。く。死。お。つ。れ。ま。お。折。ら。誰。と。あ。ら。に。汀。お。茂。れ。蘆。の。中。に。り。
 箭。を。射。お。さ。る。ゆ。冬。蟻。の。飛。ぶ。が。ごとく。一。箭。お。二。人。を。射。射。後。お。鏑
 の。鳴。響。く。隨。お。命。を。隕。と。賊。兵。十八。九。人。お。及。び。し。り。ん。こ。ん。せ。も。い
 う。ふ。と。駭。死。怖。と。二人。の。少年。お。生。拘。れ。ハ。軍。あ。つ。る。う。ひ。の。め。れ。怪。げ
 かな。王女。を。生。拘。ら。んと。て。可。惜。命。な。ら。し。る。ひ。と。と。散。動。く。持。亀。を

春説子長月讀



小玩球の
鳴北
馬朝
寧王女
と核の

本言日

びく。これ先小と立足もろく。みな逃まりぬ。當下枯蘆の穂を
 ぐさぐさとして。私を水際手槽よせつ。身の丈七尺射の目猿の臂
 威風凛然とこれ壯士年の齡ハ。三十七八なるらんとおほしたる腹
 巻よ小舟臙當して黄金の太刀次佩被るる義の立掻遣捨
 ず。弓杖投りけ。閃りと飛ぶ。私をたなえ岸のほり。王女のほり
 によこよる。これハ是いうる人ぞ。清和天皇七世の皇孫鎮守府
 將軍陸奥守源義家朝臣の嫡孫六條判官為義の八男鎮西八郎
 為朝なり。王女ハ目もやかくこれをえん。ぬまの曹司と噂びかぐる。声も
 ハ又白縫小衣むかりも異つる。これおもわんて忙しく。走りよらん
 とすれハ石の下ハ布目し袂も拂と對離る。契りのほりた吾妹子ハ
 声ハ似これと面影ハ。こが妻もろね他一人ハ夫と噂も不實く。

為朝ハ志はじらら観るそ。ゆえにこもなかりけ。抑為朝ハゆる
 八月十六日。風濤の難小係る。船破れ。妻子沈淪。その身續岐院
 の眞助ゆりて。脱とぐれ死を脱れ。こが妻もろね。その物かろハ
 捨遣篇の首よ挽起とて。續めてまつし。

椿説弓張月續編卷之六 畢

此書ハ曲亭翁の著述なり。北斎主人の繡像とありあり凡
 五編一帙ハのく六冊なり。全本と。既ハ海内ニ發行せり。
 四方の看管より。高評を仰ぐ而已。
 文化五稔歳次
 戊辰季冬吉朝
 書賈 本所松坂早
 平林庄五郎梓

和漢書籍賣捌處

十一月

和漢
西洋
書籍賣捌處

大阪心齋橋博勞町角

群玉堂河内屋
岡田茂兵衛

